

“Creatio ex nihilo”の起源

川 田 熊 太 郎

一 いとぐち

「虚無からの創造」という言葉は広く一般に知られている。

また私がこれを知ってから既に久しい。これは何時の頃からであろうか。正確には思出せない。しかし、これが問題と成り始めたのはヨーロッパの哲学書を、及び、その感化の下に書かれた我国の哲学書を学び始めた頃からである。それらの書には、これが自明のことの如くに、或は原理的意味を持つているかの如くに、書かれていた。これは、そのように、自明なのであり或は原理（証明せられぬ最高原則、始元）であるのかも知れぬ、しかし、にわかには、これを自分自身が考えるに際しての原理として、私は之を用いることができなかった、というのには、私にとってはその自明性が欠けていたからである。「時かぬ種は生えぬ」のであり、「無からは何物も生じない」のこそは経験によりて実験せられた原理であるから。

かくて私はその（1）意味と（2）起源とを求めた。探究の道は短くなく且つ平坦ではなかった。嗤笑に会った事もある。

問題に摩替えられたかの如き感をもった事もある。

二 何処に在るか

一体、この原理的表現は何処に在るのであるか。ヨーロッパの哲学や宗教の書物を読んでいると、我々はこれにしばしば出会うのである。しかし何処にと問う或は問われる時には、急には答がみつからない。私は幾度かこの窮地に在る自己を見出した。故に探究した。しかしみつからぬ。一時は断念した。しかし忘れ去ったのではない、それを何となく探す気持は持続していたのである。或時にジルソンの『中世哲学史』⁽¹⁾を読んだ。その第十六頁に、虚無から創造する唯一の神の思想をキリスト教はユダヤ教から継承しているのであり、それは初期キリスト教の著作者達に感銘を与えたのであり、この時代のものとしては意外な力強さをもって表現せられている、と書かれてあり、その出典として『ヘルマスの牧者』が挙げられ、これが起源として『マカビー第二書、七、二八』が挙げられている。

ジルソーンの知識を信用する私にとりては、これによりて、この原則又は表現“creatio ex nihilo”が架空のものではなくて、歴史的現実性のあるものとなった。しかし、なお問題は残る。『ヘルマスの牧者』は何か。『マカビー第二書』とは何か。キリスト教の文献の十分な知識をもたず、のみならず、プロテスタント・キリスト教の側からキリスト教に近づきたる私には此の二つの出典は共に謎であった。しかし続けて研究していた私には前者が使徒後教父達のうちの一人の著作であり、後者が旧約聖書の外典であることが判明して来た。幸に前者に関してはライトフットの『使徒後教父達』⁽²⁾を入手することができた。後者に関しては、私には聖書の外典なるものが、全くと言われてよいほどに、知られていなかったのである。故にキリストによる地獄の征服というのを見ても聞いても、その出典はわからず、従ってそれは宙に浮いたものであった。しかし後日、新約の外典を知るに及んで、それは『トマス伝』に根拠をもつものとわかった。旧約聖書との

関係においても事情は同一である。明治十三年の邦語訳新約の中に新約外典は見られぬが如く、明治廿年来の邦語訳旧約聖書の中には外典はあらぬのである。マルティン・ルター訳のドイツ語旧約聖書も同様である。従って『マカビー書』なるものは謎であった。しかしラテン語訳聖書(ヴルガータ)⁽³⁾とギリシャ語訳旧約聖書(セプトゥアギンタ)⁽⁴⁾とを入手し且つ読

むに至りて謎は氷解した、というのは、これ等のうちには『マカビー書』があるからである。最新の英訳聖書のうちには旧約聖書外典は取入れられてある。

以上によりて「虚無からの創造」の出典は明白となった。或は、これは自明のことを新しく探索するのであって、その愚や笑わるべきかも知れぬ。しかし、初めてキリスト教の思想の中へ入り、神学を学んだこともなき者が文献を模索したのである。それ故に、筆者にはやむをえぬことであった。そして見出された諸文献はみな信頼するに足るものである。

以下において、『旧約聖書』によりて、「虚無からの創造」のことを述べ、『ヘルマスの牧者』によりて、それを補うことにしよう。

三 虚無からの創造

a 文化史的背景

「虚無からの創造」という表現の起源となっているのは、右のマカビー第二書に記されている一人の母の言葉である。かく言うもそれは俄かに了解せられることではない。故にこのためにはその母が此の言葉を口にするに至れるところの文化史的背景が明らかにせられなければならない。

その母が之を口にするという事件は前一六九年頃にエピプァネース(epiphane's 示現)を称するアンティオコス(Antiochos)

第四世の治世（前一七五—一六三）の下にパレスチナで起ったのであった。

このアンティオコス第四世はセレウコス王朝（Seleukidai）の第八代目である。初代のセレウコス第一世ニカトール（三〇四—二八一）はティグリス河畔のセレウケイアの王であった。アレクサンデル大王（三三六—三二三）の大帝国の内に彼は併合せられていたが、大王没（三二三）後の後継者達の間の争闘に乗じてその勢力を伸ばし、ティグリス・エウフラテス河畔から小アジア、シリア（パレスチナを含む）を領有する。そして彼は統治の政策としては大王のヘラス化を継承して推進する。しかしセレウコス王朝は小アジア、特にシリアに於て栄える。

b 七人兄弟とその母

第八代アンティオコス第四世は、一八九年に人質としてローマに滞留していた。故に彼はローマの制度を模倣する。しかし彼は昔からのギリシャ文化を支柱とする。そして彼はオリンポスのゼウス（Zeus Olympios）の礼拝を国内に広め、従ってエルサレムに於ても此のゼウスをヤーヴェー（エホヴァ）に等しきものとして礼拝せしめる。また彼はエルサレムの神殿を汚した。これは伝統の信仰を死守しつづけているユダヤ人の反抗を引起した。その反抗の中心となったのは聖職者ア

サモーナイオスの一族（英 Hasmonaens, 独 Hasmonäer）である。その頃は既に老人であったマタティアス（一六六死）は立上りて律法を排棄せぬことの範を垂れる。エレアザル（Eleazar）は殉教の範を立てた。マタティアスの息子イューダス・マカバイオス（Judas Makkabaios 一六〇死）は父及び兄弟と共に彼等の許に集まれる人々と共に勇敢に戦い、それによりてユダヤ人のために暫時の独立と平和とを回復した（前一四二—一三三）。マカバイオスは「槌」、いな、「鎚」の義である。

この迫害の際に、あの七人の兄弟は彼等の母とともに捕えられ、律法に反して豚肉を食せしめるが為に鞭打たれる。『申命記』十四・八は豚肉を食うべからずと明白に定めている。第一男は、我等の父祖の律法を破るよりは死ぬ覚悟であると言ひ、主は彼の召使をあわれみ給うであろうというモーゼの背教を戒しめた歌を思出さしめて殺されてゆく。

第二男も迫害に屈することなく、「汝は極悪人であるが、私達をこの現実の生活から自由にして呉れる。そして我々は主の律法のために死ぬのであるから、かの宇宙の王者は我々を、新らしくして、永遠の生命へ挙げ給うであろう」との言葉を最後として死する。

第三男は、拷問にかけられ、豚肉を食べるか問われた時に、舌を出し、勇敢に手を突き出して言った、「天にいます神はこれらのものを私に下さったのである。神の律法はこれ

らの物よりも、大切である。そして、これらの物を彼から受け戻すと私は信ずる」。これを聞いた王や家臣達は、この若者の精神と苦痛の完全な無視とに驚いた。

つづいて第四男が拷問にかけられる。死に臨んで彼は王、アンティオコス第四世に言った、「人間によりて殺さるるも、我らを復活せしめようとの神の約束を大切にすることが良い。汝らにとりては復活はあらぬであらう」と。

つづいて第五男が引出されて拷問せられる。王を視ながら彼は言った、「汝は死すべきものでありながら、我らを殺す権力をもっている。しかし神は我らの種族を見捨てたと想像する勿れ。彼の偉大なる能力が汝及び汝の子孫を苦しめるのを待っていて視よ」と。

第六男も拷問にかけられ、死にながら言った、「汝自身を欺くな。我らの罪の故に我らはこの苦しみを受けるのである。我らは神に対して罪を犯して、此の恐るべき苦しみを我ら自身の上へまねいたのである。汝が神に対して闘わんとしていることの結果を汝は免れるであらうと考えるな」と。

彼らの母は、なかでも、注目せられるべく、また特別の尊敬をもって記憶せられるに値いする。彼女は一日のうち七人の息子達が死に尽すのを視ていたし、また勇敢に堪えたのは主に信頼をかけていたからである。彼女はつぎつぎに一人一人の息子を母国語で激励した。気高い決意にて満たされ、

女ながらも彼女の心は男らしき精神に燃えて、彼女は彼らに言った、「お前は私の腹に現われて来た、それがどうしてかを私は知らぬ。お前に生命と呼吸とを与え、汝の骨組みを整えたのは私ではない。生れる時に人を形造り、一切の物の発生を計劃するのは此の宇宙の創造者である。だから、彼は、慈悲をもつて、汝に生命と呼吸とを与え返して下さるであらう、お前は彼の律法を自分自身よりも尊しとしたのだから」と。彼女には第七人目の息子が残るのみとなった。彼は王アンティオコス第四世のあらゆる利益をもつてする誘惑をも聴き容れない。それで王は彼女を呼び、彼に言って聞かさせる。彼女は、王にわからぬように母国語で息子に語りかけた、

「子よ、私を可愛そうと思ってくれ。私はお前を九ヶ月間腹の内で養った、三年間お前に乳を飲ませた。頼むぞ、子よ、天と地とを見よ、それらの内にある総べてのものを見よ、そして、それらのものを神は有らぬものから造ったことを知れ、人間もまた同じ仕方では有らしめられることを知れ。この人殺しを恐れるな。死を受けよ、そしてお前が兄さん達にふさわしいものであることを示せ、そうすれば、神の恵みによって私はお前を、彼らともろともに戻してただけであるう」と。彼女が言い終るか終らぬうちに第七男の若者は言った、「汝らは何を待っているのか。私は王の命令に従わない。私は私達の祖先にモーゼが与えた律法に従う。アンティオコスは

王よ、汝は、ヘブル人達にあらゆる迫害を工夫したのであるから、神の御手を免れぬであろう。我々は自身の犯した罪の故に苦しんでいるのである。我々を直し懲すために我らの生ける主は暫時の間我らに怒っているが、彼は彼の召使と仲直りをなさるであろう。しかし汝、不敬なる者よ、人類中の最下等のものよ、空しき希望にふけるな、偉大なりとの幻想におぼれるな、神の召使に手をかける者よ、万能にして一切を見たまう神の裁判を今既に免れていない。私の兄達は、神の契約に忠実に死んでいった、短い苦痛を経て永遠の生命へ。しかし汝は神の判決によりて汝の高慢にふさわしい罰を受けるであろう。私は、私の兄達の如くに、我々の父祖達の律法のために私の身体と私の生命とを捧げる。私は神に訴える、彼の人民に速かに恵を示されることを、また、彼のみが神たることを汝に鞭をもって知らしめることを。万能者の怒が、それは正当に我らの種族の上におちたのであるが、私及び私の兄達に関して終ることを私は祈る」と。王は之を聞いて、怒に我を忘れ、兄達をよりも彼を苦しめた。そして若者は死んだ、主に全幅の信頼をかけながら、何の汚れをも引起すことなく。そして最後に、息子達の後を追うて、彼らの母も死んでいったのであった。⁽⁶⁾

右の如く「虚無からの創造」という表現の原型はマカビー第二書七・二八に見出されるのである。そして、その趣旨は

“Creatio ex nihilo”の起源(川田)

(1) 万能なる唯一柱の神、(2) その神による万物、天地及び人間の創造、(3) この神による復活の望み、(4) 永遠の生命、(5) 靈魂のみならず、また身体の不滅、に帰着するのである。

四 ヘルマスの牧者

a 伝承

右の旧約聖書マカビー第二書七・二八は「虚無からの創造」の原典及び原型を示していると考えられるのであるが、使徒後教父文書のうちの『ヘルマスの牧者』は、之にもっとも近き伝承を示すものである。

前掲、ライトフットを、左に、原文から訳出しよう⁽⁷⁾

誠命 一

何よりも第一に信ぜよ、誰だ一人の神のみがいますと。彼が総べてのものどもを造化し、整理し、存在せぬものから存在へ総べてのものどもを造化し、また総べてのものどもを知り給い、しかも唯一人知られえぬ者でいます。2、それ故に彼を信ぜよ、また彼を恐れよ、そして彼を恐れて自制せよ。これらのことどもを守れ、そして総べての悪を捨てされ、そして正義の意味する総べての徳を着用せよ、そのとき汝は神によりて生きてゆくであろう、若しこの誠命を守るならば。

b 原文の問題

私は「虚無からの創造」という表現が最原初的には何処にあるか、従ってその原文は何であるかを追究しているのである。そしてそれが最原初的には旧約外典のマカビー第二書七・二八にあること、その比較的初期の伝承は使徒後教父文書のうち『ヘルマスの牧者、誠命 一』にあることを知ったのである。

次に、これが原文は何であろうか。

一 『ヘルマスの牧者、誠命 一』はギリシヤ語である。そして、それは

ho……kai poiēsas ek tou mè ontos eis to einai ta panta

である。我々には之をそのままに認知するより他に仕方がない。

二 『七十人訳聖書』(セプトゥアギンタ)の当該の箇所は

ouk ex ontón epoiesen autá ho Theos.

である。問題は之を原文と見るか否かである。

三 よく知られているあのラテン語の表現はヴルガータのものである。即ち

ex nihilo fecit illa Deus.

ただし、“fecit”は“creavit”と同義である。トーマス・アクィナスは後者をとっている。Summa contra Gentiles, I, XV』を参照せよ。“creasse”という不定動詞形は定動詞形へ

戻すならば、“creavit”である。

五 資料的価値

(1) ヘルマスの牧者

これに就いては問題がない、というのは、これが原文そのものであるから。

(2) セプトゥアギンタの箇所

問題があるのはセプトゥアギンタの箇所である。(一)これは原文であるのか。(二)原文とみなさるべきものか。(三)訳文であるのか、けだし旧約聖書の原文はヘブライ語であるから。

マカビー第一書はアスモナイオスの宗族 (Hasmoneans, Hasmonæer) の興起に関心をもつものであるが、第二書は、その続篇ではなく、宗教教育に関心を持つものである。そしてアンティオコス第四世の圧迫に対し、モーゼの律法を守る人々の反抗とその成功とを描くにヘレニズム時代の華麗にして情緒的なギリシヤの文体で述べるもの。そして問題の箇所はその圧迫迫害を叙述する所に位置する。

デンタン⁽⁸⁾によるに、この書の著者たる抄略者は抄略者としてより以外には知られていない。彼の抄略したる原本はキュレーネーのヤソーンという人の五冊から成る著作である。キ

ユレーネーはアフリカの北岸に在る。ヤソーンにつきてはそれ以上のことは知られていない。この原本は共通ギリシヤ語で書かれていたであろう。

セプトゥアギンタは既にヘブライ語を読みえぬ人々のために、ヘブライ語聖書が当時の共通語ギリシヤ語に翻訳せられたものである。

故にヘブライ語の聖書の中の一つの文書としてのマカビー第二書はギリシヤ語をヘブライ語に直したのであったであろう。そしてそのヘブライ語の聖書が共通ギリシヤ語に、伝えらるるが如くに、七十人の学者達によりて、翻訳せられた時には、他の部分とともに此のマカビー第二書もギリシヤ語へ訳し戻されたのであろう。その際にヤソーンの五冊から成る原本が参照せられたか否かは不明である。また今日の我々はヤソーンの原本を所有していない。

これらの事情は原本のギリシヤ語が一度はヘブライ語に訳された。そして更にそのヘブライ語本がギリシヤ語へ訳し戻されたことを推理せしめるだけである。

ヤソーンの五冊から成る原本が共通ギリシヤ語で書かれていたということも、確率は高いが、推測である。

故に動かぬ証拠を挙げることはできぬ。しかし、セプトゥアギンタの当該の箇所のギリシヤ語をもってしたる表現が「虚無からの創造」の最原初的表現であるか、或はそれに最

も近き表現であろう、と推定するより他はないであろう。ヴルガータの表現は動かされえないものである。

六 むすび

以上我々は「虚無からの創造」の起源、その最原初の表現を求めて来た。そして

(一) その最原初の表現と見らるべきものを見出したのである。

(二) 表現は常に表現せられるものをもっている。これは此処では、一言で言えば、万能なる唯一神への絶対的なる信頼である。これが、ユダヤ・キリスト教の根柢そのものである。

(三) この神の信頼、これが果して仏教という本来の宗教の根柢を成しているのであるか。明白に、そうではない。それ故、仏典の何処かにこの思想があるとか、道元禪師が、彼の『正法眼蔵』を以って、その生涯を通じて、「虚無からの創造」を説きつづけていた、などとは夢にも言われぬことである。

(四) 仏教はユダヤ・キリスト教ではなく、また、これら以外の何ものかでもない。紛らわしい手がかりを求めて、摩替をしてはならぬ。それは統一への余りにも性急な仕方である。統一は悠々と待たるべく、或は統一は遂に現われずとも

仕方がないのである。(昭和五十年七月十二日)

- (一) Gilson, Etienne : *La Philosophie au Moyen Age*. Deuxième édition. Payot, Paris. 1947.
- (二) Lightfoot, J. B.: *The Apostolic Fathers*, edited and compiled by J. R. Harmer. London, Macmillan. 1926.
- (三) *Biblia Sacra juxta Vulgatam Clementinam*. Divisionibus, Summariis, et Concordantiis ornata. Denuo ediderunt complures Scripturae Professores Facultatis Theologicae Parisiensis et Seminarii Sancti Sulpitii. Typis Societatis S. Joannis Evang. Desclée et Socii Edit. Pont. Romae——Tornaci——Parisii. 1927.
- (四) *Septuaginta*. *Id est Vetus Testamentum Graece juxta LXX Interpretes*. Edidit Alfred Rahlfs. Vol. I. *Leges et historiae*. Stuttgart. Privilegierte Württembergische Bibelanstalt. 1935.
- (五) *The New English Bible with the Apocrypha*. Oxford University Press, Cambridge University Press. 1970.
- (六) *トキヨウキョウカクキョク*・一—二・四一
- (七) Lightfoot, J. B.: *The Apostolic Fathers*, p. 318, 422.
- (八) *The Interpreter's One-volume Commentary of the Bible*. Edited by Charles M. Laymon. Abingdon Press——Nashville and New York. 1971. P. 600. *The Second Book of the Maccabees*. Robert C. Dentan.